

丹波市男女共同参画センターだより

「当たり前」を疑う ～男女共同参画とメディア～

かつて、私は「コマーシャルの中の男女役割を問い直す会」で活動していた。会は休止したが、今もジェンダー平等の視点でメディアをウォッチングしている。

画期的と思ったのは、昨年10月、NHKの「テレビ体操」に男性アシスタントが登場したことである。60年以上続く人気番組の突然の変化に反響は大きく、『男性に違和感や嫌悪感を持った』、『逆になぜ今まで女性だけだったのかとテレビ体操の「当たり前」を疑った』など、しばらくSNSの投稿が続いた。

男女共同参画社会を実現するために、私たちができることとして「当たり前」を疑うことを提案したい。先ほどの「テレビ体操」は、昨年の春まで女性アシスタントはレオタード姿だった。私はレオタードの女性を手本にしながら長年体操してきたが、居心地が悪かった。レオタードの女性を眺めることは「当たり前」で、女性の体を鑑賞する（される）ことは失礼ではないということが無意識に刷り込まれてしまうのではないだろうかと思った。レオタードをやめて体操服にしてほしいとNHKに投書したことがある。

小さなことかもしれないが、レオタードで体



小川 真知子

(NPO 法人 SEAN 理事長)

操する女性の「当たり前」を疑うことから、男女の役割や、らしさの問い直しが始まり、多様性を認める社会につながると信じている。

男女共同参画社会の実現にはメディアの役割が大きい。多くの情報がメディアを通じてやってくる。メディアはものの見方、考え方に影響を与える。今年の男女共同参画白書によれば、2021年の各種メディアにおける管理職に占める女性割合は、民放 15.3%、NHK 11.1%、新聞社 8.6%であった。意思決定部門の女性を 30%にという政府の目標に対し、20%にも達していない。固定的な性別役割分担意識の植え付けや押し付けをしないためにも、メディア分野の経営層や管理職において性別による偏りがないことが重要であり、意思決定過程への女性の参画拡大が求められるのではないだろうか。

現代は、SNSなどを通じて誰もがメディア(情報発信者)になる時代。現役新聞記者たちが、無意識の差別や偏見の気づきの書として編集した「失敗しないためのジェンダー表現ガイドブック」(小学館)を紹介したい。丹波市男女共同参画センターの書架にも備えてあり、貸出もされているので、SNS や地域、学校、企業などの広報、宣伝の前には、「当たり前」を疑う参考にしてほしい。